

る」という神の召しを受けて、一人でカルカッタの貧民街で学校に行けない子供たちを教えることから始め、やがて身寄りのない人々や死にゆく人々を看取るという神の愛の宣教者会という修道会を立ち上げて献身していったことは皆さんがご存知の通りです。

『ベネディクトの戒律』やトルストイの民話「人は何で生きるか」やマザー・テレサを支えていた言葉も「最も小さい者の一人にしたのは、私にしたのである」という同じ聖書の言葉だったのです。私たちも「名もなく弱く傷ついたそんな隣人に寄り添うものとなりたい」と校歌にあるように、最も弱い立場の人々に配慮する生き方をしていきたいものです。祈りましょう。

(2018年9月28日チャペル・アワー)



チャペル説教(2018年5月11日CAH)

「レジリエンス

―立ち直る力―

宗教部長 下田尾 治郎

敬和学園大学が二つの教育の柱を持つていることは、皆さんもご存知のことと思います。一つは、リベラル・アーツ教育であり、もう一つは、キリスト教主義教育です。今日は、この双方の柱に共通していることとして、レジリエンスという耳慣れない言葉をとり挙げてみようと思えます。それを「生きる力」として提示してみたいと思うのです。

リベラル・アーツという言葉については、本学入学前から、様々な仕方、その教育的意義について知る機会を持たれていたことと思います。本学を紹介するパンフレットに、本学の教育の特徴としてリベラル・アーツということが打ち出されています。入学後に配布された「基礎演習ハンドブック」というテキストの中でも、一章が割かれ、学長先生が、その歴史的起源や展開、また現代におけるリベラル・アーツということについて詳しく説明してくだ

さっておられます。また、今年度の第一回のCAHにおいては、森本あんり先生(国際基督教大学副学長)が「AI時代のリベラル・アーツ」を主題に素晴らしいご講演をしてくださいました。

リベラル・アーツに関して、いろいろな定義をすることはできると思いますが、簡単に言うならば、自らの専門とする学びを深めつつも、専門知識に偏ることなく、幅広い知に触れることを通して、世界や社会や人間に対する興行きのある理解を有する、バランスの取れた人間を育むことを目的とする教育といってもよいかと思います。世界や社会、またその中に生きる人間を理解するにあたっては、様々な角度からのアプローチが存在する。また、様々な角度から光を当てることを通して、世界や社会や人間は、より立体的に、またその興行きを持った姿において捉えうるができるのだとの確信が、リベラル・アーツ教育にはあるのです。このことを別の言葉で言い表すならば、リベラル・アーツは、一面的な見方(その最たるものは偏見といってよい)を超えた複眼的思考を養うことに主眼を置く教育と

いつでもよいでしょう。その複眼的思考を備えることを通して、一人の人間の中に、レジリエンスというものが養われてゆくことを、お話しできたらと考えています。

レジリエンスという英語の意味を、これまで説明しないで来ましたが、実は、教育心理学などにおいては、盛んに使われ始めてきた言葉でもあります。その分野においては、この言葉は、「折れない心」という風に訳されることが多いようです。「折れない心を育てるには」といった感じで。辞書にあたってみると、「しなやかさ」あるいは、「回復力」といった訳語を見受けることができます。わたしは、このレジリエンスを、「倒されたとしても、再び立ち上がって歩み直す力」あるいは「心が折れそうなときに、もう一度、自らの生を見つめ直し、受け止め直し、立ち上がり、歩み直す力」というふうに理解したいと思うのです。世界を、社会を、人間関係を、また人生を、複眼的に見る力を養うことを通して、レジリエンスを培ってゆくのが、リベラル・アーツ教育の一つの意義なのです。

皆さんと同じように、私もリベラ

ル・アーツを柱とした大学を卒業しましたが、在学中に受けた一つの授業についてお話しします。一般教養科目に属する英文学の一つの授業の際、教授がW・H・オーデンと言われる詩人の「美術館」と題された詩を紹介してくださいました。

その詩は、詩人がブリュッセルの美術館を訪れた際に目にしたピーター・ブリューゲルという画家の「イカロスの失墜」と題された絵を見た時の印象を記した作品でした。その中でオーデンは、ブリューゲルが、悲惨な出来事の世界の中の位置について過たずに認識していたことを記します。それはブリューゲルに限らず、巨匠である芸術家がしかと認識していたこの世の真理でもあるというのです。イカロスというのは、ギリシャ神話の登場人物の一人。父親が背中に蠟によって取り付けてくれた翼により、大空を駆け巡っていたのですが、ある時、太陽に近づきすぎたために、蠟が溶け、翼を失い、海中に墜落してしまおうという悲劇的なお話です。けれども、この悲劇的な出来事をブリューゲルは、日常の中の誰も気に留めない程の些細な出来事として描いたことを詩人は語る

のです。授業が終わると、すぐさま図書館に駆けつけ、ブリューゲルの画集を探し出して、その絵を見つけたことを思い起こします。実際、その絵の中で、イカロスの悲劇は、絵の中のひと隅に描かれた海の中から突き出された一本の足に過ぎないものとして描かれており、前景には畑を耕す農夫の日常がはるかに大きく描かれていたのです。その詩を教えられることを通して、またその絵を知らされることにより、不思議なことに心が解き放たれたことを思い起こします。時に、世界や自分に対する悲観的な見方に傾きがちであった19歳の少年にとって、悲劇の位置は、世界の中では、日常の営みの中に埋もれてしまうほどの一点に過ぎないという観点は新鮮でした。その視点は、絶対的に思っていた自らの苦しみを相対化することを学ぶとともに、その一方で、何気なく過ごしている私たちの日常世界の傍らに、人知れず大きな苦しみを抱えながら歩いていく無数の人々の存在へと、心を解き放つてくれたのです。私にとって、この授業は、自己の狭い視点から自由にするとともに、世界を異なる視点から（異なる光の下で）

読み直すことを教えてくれた、リベラル・アーツそのものを象徴する授業であったと思います。

世界や社会を、異なる視点からの光のもとで（複眼的に）読み直すことを学ぶこと、それは、自らの生をも異なる光の下で受け止め直すことへとつながってゆく。それは本当の意味での「生きる力」を養うことと、いってもよいかもしれません。人生において、行き詰りの経験をしない人はいません。そんな時に、リベラル・アーツが本来の意義を発揮するのです。それまで自らが依りどころとしていた世界観、価値観が揺るがされ、アイデンティティが危機に瀕してしまったときに、もう一度、世界を、また自らの人生を複眼的に読み直し、受け止め直し、歩み直す力としての「レジリエンス」を培ってくれるのがリベラル・アーツだといってもよいでしょう。数年前、リベラル・アーツの教育を受けたのちに英文学者になり、専門学校の副校長もしたことがある兄がこんなことを語ってくれたことがあります。「専門学校を出た卒業生は、それぞれの場において誠実に立派に仕事をして

に遭った際に、その後の人生をどうやってつないでゆくかで非常に苦労するという現実があるんだ。そんな時に、リベラル・アーツの強みと意義を感じざるを得ない。リベラル・アーツを受けた学生は、終わったと思われた人生をもう一度始める力を培っているのだと思う」リベラル・アーツの培う、「生きる力」としてのレジリエンスについて教えられる一言でした。

敬和学園大学が掲げている教育のもう一つの柱であるキリスト教主義においても、実は、この「生きる力」としてのレジリエンスということが深く関わってきます。もちろん、創造主である主なる神を敬い、またその方により愛をもってこの世に生を与えられた一人一人の間は、等しく平等であり、尊厳を有すること。そのような者として創造された自らの命を大切にするとともに、他の人間の尊厳をも深く心に留め、隣人に仕えてゆく人間を育成することが、キリスト教主義教育の根幹にあることとはいうまでもありませんが、もう一つ、キリスト教主義教育に伝えられることとして、また聖書から受け止めることのできる大切なメッセージ

ジとして、「生きる力」としてのレジリエンスというものを掲げたいと思ふのです。その際、レジリエンスは「折れない心」というよりも、「折れてしまった心」をもう一度接ぎ直してくださるかたの愛によりあたえられる力ということができると思います。

もう一度、自分たちを見つめ直し、本来の使命を受け止め直し、新たな歩みへと、踏み出してゆくことが語られています。預言者たちを通して語られる神の言葉により、イスラエルの民たちは、立ち直り、歩み直す力を、すなわち、レジリエンスを与えられたといってもよいでしょう。

も、主イエスは、ペテロのその決意がまことに弱き者であること、更には、ペテロがご自身を裏切り、見捨てるであろうことも。けれども、主イエスは、ペテロのその挫折（敗北）の先に始まる生をも見ておられるのです。ペテロが、その取り返しのつかない挫折から立ち直り、やがてその経緯をもって、他者を助ける者となることを信じておられる。そしてその力を与えようとされるのです。「しかし、わたしはあなたのために、信仰がなくならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。（ルカ22章32節）。その後、復活された主イエスは、ペテロの折れてしまった心を接ぎ直され、ペテロに「ご自身の大切な業を託し直されてゆきます。主イエスご自身、十字架の死というこの世的な目から見れば徹底的な敗北を味合われた方。けれども、敗北としての十字架は、神の深い御心のもとでは、この世の力に対する神の愛の勝利の証でもあることです。主の甦りにより証されたのです。

生を読み直し、未来に向けてより深き生を生き直してゆくのです。朝日新聞の第一面には、哲学者の鷲田清一さんが「折々の言葉」とのコラムを担当されていますが、ある日のコラムに「すべての人生は敗者復活戦である」との言葉が語られていました。挫折のない人生、敗れることのない人生などは存在しません。その敗北からどのように歩み直し、深く生き直したかによって人生の真価が問われるのです。大切なことは、人生における敗者復活戦をいかによく戦ったかということでしょう。そして、その敗者復活戦へと歩み出す力を与える力が、レジリエンスであり、リベラル・アーツ教育、またキリスト教主義教育は十分にそれを与えるものであることをお伝えしたいのです。この二つを教育の柱とする敬和学園大学に学ぶことの意味と幸いを是非、覚えていただきたく、今日はお話をさせていただきました。

旧新約聖書を通じて語られているメッセージの一つは、次のように言うことができるかもしれません。「すべてが終わったと思えるところから始まる新しい人生がある。むしろ、そこから始まる新しき生こそが、あなたにとっての本当の人生だ」。一年生のキリスト教学において、旧約聖書を取り上げ、学びました。神の民イスラエルの歴史における重要な出来事として、出エジプトや王国成立とならんで、バビロン捕囚があることを学びました。それは、イスラエルの民（ユダヤの民）にとって、悲劇的な亡国の出来事、神に選ばれた民としてのアイデンティティーを崩壊させてしまうような出来事でした。けれども、すべてが終わったと思われるような絶望の深みの中から、民たちは預言者たちが取り次ぐ神の言葉の光のもとで、

新約にも、「終わったと思えるところから、あなた（がた）の本当の歩みは始まるのだ」とのテーマは受け継がれてゆきます。イエスの弟子たちの歩みがそうでした。旧約に源を発する神の救いの歴史の文脈のもとで、また主イエスの十字架と復活の光のもとで、主イエスご自身の言葉の光のもとで、取り返しのつかないほどに頓挫してしまっただかに思える自分たちの人生のかげらを拾い直し、受け入れ直し、読み直し、未来へと歩み直してゆく経緯について、新約聖書は語ります。皆さんは、ペテロという主イエスの一番近くにいることのゆるされた弟子たちのことを聖書を通して学ばれたと思えます。イエスの受難が近づくと、ペテロは、他の弟子たちはいざ知らず、自分だけは決してイエスを見捨てることはない」と主に断じます。けれど

が、主の甦りにより証されたのです。その十字架と復活の光の下で、ペテロをはじめとする弟子たちは、折れてしまった心を接ぎ直され、自らの

またキリスト教主義教育は十分にそれを与えるものであることをお伝えしたいのです。この二つを教育の柱とする敬和学園大学に学ぶことの意味と幸いを是非、覚えていただきたく、今日はお話をさせていただきました。

